

石見銀山遺跡 ニューズ

Newsletter of the Iwami-Ginzan Silver Mine Site

MAY 2003 NO.5

平成15年5月7日発行 第5号

島根県・大田市・仁摩町・温泉津町教育委員会



>> Contents

page	2	街道調査、佳境に (1) 現地踏査から (多田房明) (2) 地質調査から (中村唯史) (3) 文献調査から (佐伯徳哉)
	6	総合調査 (1) 遺跡発掘調査 (中田健一) (2) 古文書・文献調査 (仲野義文)
	8	発掘のあゆみ (遠藤浩巳)
	9	2/11公開シンポジウム ここまでわかった石見銀山 (大門克典)
	11	鍍絵の魅力③ (渡部孝幸)
	12	温泉津町からのほっと情報 西田地区採集の蹄鉄
	13~14	石見銀山遺跡調査活動日誌抄
	14	シンポジウム「石見銀山の原像を探るー世界遺産登録をめざしてー」

【雑駁図(1570年頃) 島根県教育委員会蔵】
 JAPAN(日本)は、Mina de plata(銀鉱山)の記載が見られる。
 当時の西欧人の東洋や日本の地理認識が見られる。

利用されています。旧道沿いには福光石を採石した小さな石切り場がいくつかあり、石材が現地調達されたことが想像できます。

清水を過ぎ西田へ向かう道中、道沿いや山の斜面に大きな転石が多く見られるようになります。大江高山火山群が噴出した火山岩「デイサイト」の転石です。大江高山火山群は170万～100万年前頃にかけて活動した火山群で、温泉津町・仁摩町・大田市にまたがっています。



▲尾根上にみられる「都野津層」の地層

西田で湯里川沿いの小規模な谷底平野に出た後、沢沿いの道を降路坂へ向かいます。峠を越えると、木々の間から仙山と要害山が見えてきます。この山をよく見ると、急な山腹斜面に比べて山頂はなだらかで、「釣り鐘」のような形状です。この地形は「デイサイト」溶岩を噴出した火山によくみられる形状で、「溶岩円頂丘」と呼ばれます。デイサイト溶岩



▲「福光石」の切石を使って整備された古い石段



▲西田の集落と「大江高山火山群」のひとつ矢滝城山

は粘り気が強いためにあまり流れず、こんもりとした地形を作ります。大江高山火山群は活動をやめてから100万年程度経過しているので、火山地形の開削が進んでいるものの、溶岩円頂丘の原形をとどめています。



▲銀鉱床をもたらした大江高山火山群の噴出物「デイサイト」

大森の谷へ降りると、鉱石を掘り出した坑道「問歩」があります。石見銀山の鉱床は大江高山火山群の一連の活動によって作られたもので、金属分をたくさん含んだ高温の水＝「熱水」が岩盤の割れ目や岩石の隙間に入り込み、鉱石を形成しました。このように見ると、温泉津から大森は、粘土、福光石、そして銀などの金属と、地下資源に恵まれた地域であることに気が付きます。また、石見銀山は歴史的に重要な遺産であると同時に、第四紀(200万年前～現在)に活動した火山が形成した鉱床として、地質的にも重要な鉱山です。

(3) 文献調査から

……文献(古記録・切り図)調査から 世界遺産登録推進室 佐伯 徳哉



▲馬路村切図 城上山付近(広島大学中央図書館蔵)

鞆ヶ浦ルートや温泉津・沖泊ルート街道の切り図や地誌などを求めて、県内外で調査を実施しました。

広島大学の中央図書館では、中国五県土地租税資料文庫の中から、馬路・大森・温泉津・小浜などの切り図を閲覧しました。切り図は、明治初年に新税制を整えるために地域において作成されたもので、近代的な地図とは違い、江戸時代の村絵図の最終版といった方が正しいものです。従って、必ずしも正確な測量地図ではありませんので、現在の地図とをつきあわせても、なかなか双方が合致しにくいものです。ただ、切り図には、地番のほかに、小字名が豊富に記されていますし、田畑・宅地など地目別に色分けされ旧道、河川などもよく描かれています。従って、今は忘れ去られたような道や、後代に開発などで失われた道などがよくわかりました。たとえば、鞆ヶ浦から出た道が旧山陰道と出会う部分などは、国道9号線によって切り通されてしまっていますが、切り図を見ると、クランク状に道が曲がり、「オノ神」などの地名が見られ、さらに山中に入るルートが枝分れしています。

また、昔の地域情報が豊富に

盛られた地誌の調査からも、現在では殆ど知る人がなくなった地名や、神社・寺院の歴史などを知ることができました。例えば、今では地元でもだんだん忘れられつつありますが、馬路の高山・城上山の山中には、城上神社(現在は在大森)・乙見社(現在は馬路)・願城寺(現在は江津市)ほか、旧寺地・旧社地が存在していたことが知られました。また、現在、馬路の海岸近くにある城上山は、かつては四上(しかみ)とか氷上(ひかみ)とか呼ばれ、

『銀山旧記』冒頭の銀山発見記事の中にある、氷上山妙見菩薩との関係を伺わせる地名であることに驚かされました。氷上山妙見さんは、周防の戦国大名で、神屋寿禎が銀山を「発見」した当時、石見守護職でもあった大内氏が信仰した守り神でもありました。従って、このような地名は大内氏がこの付近に支配の足がかり置いた痕跡でしょうか。

馬路の高山・城上山が信仰の山であったことがわかりますが、これが銀山「発見」や銀鉱石を搬出したルートの成立との関係を伺わせているように考えられます。



▲馬路村切図 友付近(広島大学中央図書館蔵)

(1) 遺跡発掘調査 大田市 中田 健一

石見銀山遺跡の発掘調査は、総合調査として取り組まれ今回の調査で6年次を数えます。銀山400年の歴史を明らかにする目的で、特に採掘から製錬の技術、あるいは鉱山での暮らしぶりを明らかにする目的で行われています。

これまでの発掘調査から面的な広がりや時代的な幅をもち、遺存状態が良好な遺跡であることが明確になりつつあります。



於紅ヶ谷

さて、今年度の発掘調査では、以下のことが明らかとなりました。

於紅ヶ谷地区の調査では、岩盤加工遺構と周辺の遺構面との関連から於紅ヶ谷地区の土地変遷の一端を窺えました。また、近世初頭には埋没した岩盤に残る工具痕が採掘痕であることや、垂直方向からの採掘、水平方向への採掘痕の具体的な資料が得られました。

竹田Ⅰ区の調査では、下層確認トレンチで検出された「方形炉」SX14について、周辺に柱穴が、新旧をもって穿たれている状況を確認しました。



▲竹田Ⅳ区 鉄鍋出土状況

また、SX14の掘り下げの過程で、3基の炉跡が構築された順序と、そのたびに小規模な整地を施し、炉を囲っていた粘土を壊して、再度黄色粘土を充填、新しい炉が構築された状況を観察しました。

竹田Ⅳ区では、トレンチ中程の製錬遺構が集中している場所から鉄鍋が出土しました。16世紀末から17世紀初頭頃の層位であり、製錬作業に用いられた鉄鍋炉の可能性がります。鉄鍋炉とすれば2例目の発見です。今後は、詳細な科学調査が期待されます。

竹田Ⅴ区の調査では、造成作業が行われた状況に把握される場所でも、建物跡などの遺構が存在しない部分が確認されました。

Ⅴ区の地形を製錬遺構の集中するⅣ区と比較してみると、Ⅳ区の平坦面が、ほぼ水平を指向することに対して、Ⅴ区は尾根上から土が尾根先端へと移動させた状況を確認しました。また、Ⅴ区の西よりの箇所では、不定型の窪地状を呈し、上方から人為的に掘削されたことが窺えました。この地区の調査によって、仙ノ山山頂の遺構群を検討する上で、特に、平坦地の利用状況と、盛土、整地の特徴が確認されました。この地区の調査をもって、竹田地区の平坦地群の調査を終了することとしました。



▲出土谷

出土谷Ⅱ区では、昨年に継続して調査を実施し、江戸後期の製錬作業を行った建物周辺の状況が明らかになりつつあります。特に水路、道跡の変遷や、石垣が積み直されている状況がより具体的になりました。

石見銀山遺跡の考古学的調査は、銀山400年の歴史の各時代相における銀生産の具体化と再構成が一つの目的です。

以上のように発掘調査からも一定の解釈を導きましたが、それはあくまで、ある一時点での静止的な情報であり、調査結果を累積させることにより、銀生産とそれを取り巻く人間活動の実際について、より正確な再構築がなされることとなるでしょう。

(2) 古文書文献調査 仲野 義文

今年度の歴史文献調査は、邑智郡桜江町の中村久左衛門宅に所蔵される古文書について実施しました。所伝によると、中村家はじめ銀山隣村の西田に居ることから「西田屋」の屋号を称し、江戸時代の初期に現在の地である旧大貫村に移り住むようになったといえます。大貫村では代々庄屋役を勤めたほか、家業では農業以外にも江の川を利用した水運業やタタ製鉄など多角的な経営を行っていたことが、同家の文書から窺われます。

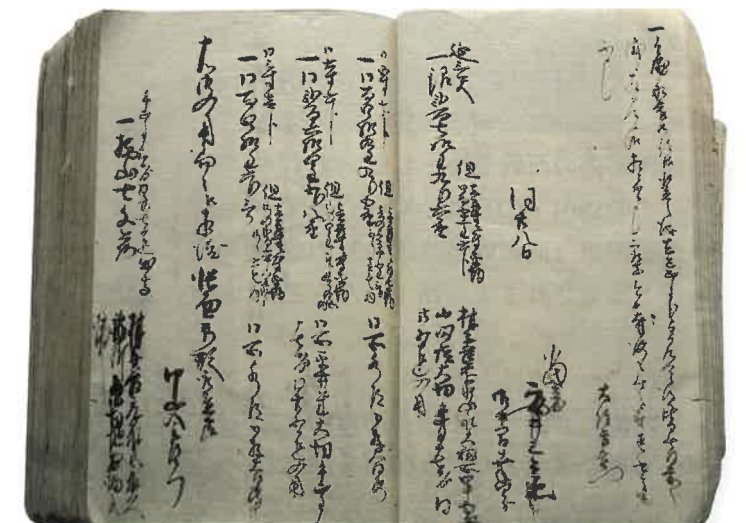


▲天明6年(1786)「銀山方御役所御用日記」

中村家の所蔵文書は近世文書を中心に2万点以上にもなっていますが、それらの文書は概ね次の文書群から構成されています。1つめは中村家自身の文書、2つめは分家である邑智郡浜原村の西田屋文書、3つめには代官所関係文書ですが、特に代官所関係文書についていえば、これはおもに銀山方役所の公務記録や勘定関係の諸帳簿類です。本来このような文書は大森の代官所にあるべきもので、また伝世するとしても代官所勤仕の地役人宅にあるのが一般的です。それ故どのような経緯でこの文書が中村家に伝わったのか、その謎を解き明かすのが今後の課題であるといえます。

さて、本調査では、膨大な文書の中から主として代官所関係文書について実施しました。ここでは成果の中から江戸時代後期の銀山経営の実態を知る、興味深い資料についてご紹介しましょう。代官所関

係文書は、おもに銀山方役所の公文書が中心であることは先に述べましたが、この銀山方役所は専ら鉱山の支配を担当する部署です。したがって、これらの文書は直接鉱山の支配や経営に関する資料であるといえますが、なかでも面白いものとして明和期から天保期の同役所の日記が21点あります。この日記は役人の勤務日誌ですが、これには1月から12月までの1年間を通じた日勤の記載があり、ここから銀山方役所における職務の実態を窺うことができます。また、この中には御直山すなわち代官所の直営間歩からの産鉱量の記載もあるため、当時の鉱山の具体的な経営状況があらかになります。参考までに、天保11年の1月から6月までの御直山における出鉱量(祖鉱)は全体でおおよそ75,944貫で、その内訳を見ると新横相6,889貫、永久稼所11,704貫、龍源寺山25,953貫、恵珍山14,741、大久保山4,267貫、新切山12,390貫となっています。当時としては現在観光坑道として知られる龍源寺山が最も多かったようです。ところで、銀山の鉱石は銅を含む大鉱物(おおづるもの)と銀鉱石である小鉱物(こづるもの)とに大別されますが、この内出鉱量の多い龍源寺山、永久稼所、新横相、新切山は大鉱物を主として産出します。江戸時代後期になると銀山では産銀に比べ産銅が活発になりますが、これはこの結果が示すように小鉱物の出鉱量に比べ大鉱物のそれが多かったためであり、これらの資料によってはじめて生産の実態が裏付けられたこととなります。



▲産鉱量の記載



▲ I区全景（左がSB01、右がSB02）

昭和63年度は、石見銀山遺跡の中で坑道内部を一般公開している「龍源寺間歩」の坑口前の平坦地で発掘調査を実施しました。龍源寺間歩は江戸時代の銀山町の大谷に位置し、文献史料上では『銀山古事覚書』に寛永年間の間歩出鉱量の記録に「龍玄寺」という間歩名があり、これが龍源寺間歩と思われる。以後、寛政年間には実際に採鉱が行われ、代官所（幕府）が直営する「御直山」の坑道です。

調査地区は銀山川右岸の坑口に至る通路に面した両側の平坦地に設定し、地下遺構の内容確認を目的に調査を行いました。東側のI区では、まず表土を除去後に礎石を基礎とする明治時代以降の建物跡2棟（SB01・02）が発見されました。SB01は3間半以上×2間の規模で検出状況から柱間は半間（約1m）になり、SB01の東に隣接するSB02は1間間隔で礎石が並ぶもののその規模を確認することはできませんでした。そしてこの二つの建物跡の40～50cm下層で江戸時代の建物跡SB03を検出し、建物基礎の石列を検出しています。

このSB01・02は明治時代に操業を開始した藤田組（同和鉱業株式会社の前身）の施設と推定されます。出土した陶磁器の年代と古写真なども合致します。施設の用途、性格については不明です。

西側のII区ではI区と同様に表土除去後に石列と整地された土間面を検出し、これらの遺構は明治時代以降の建物（SB04）と考えられましたが、その規模や構造は十分につかめませんでした。SB04の20～30cm下層では江戸時代と推定される建物跡（SB05）

の基礎となる石列を検出し、さらにこのSB05の遺構面の下層からは岩盤を加工した溝状と溜槽状の遺構を検出しています。

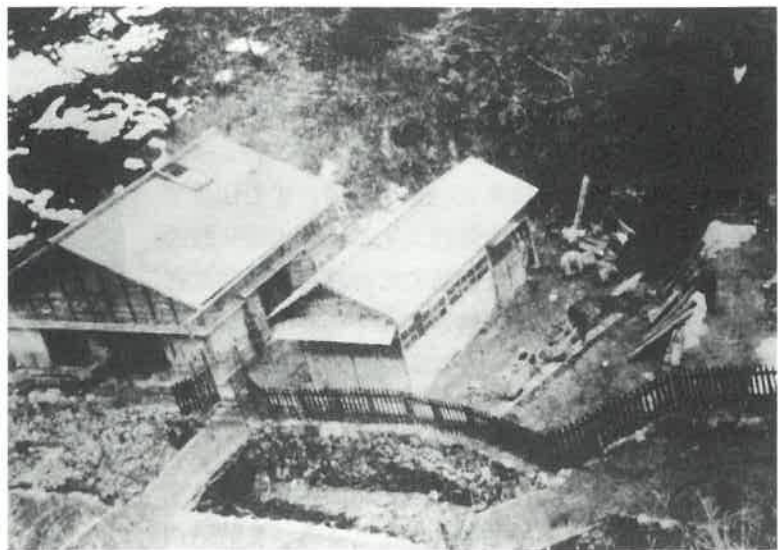
この岩盤の遺構については、上部に存在した建造物の遺構、または鉱石の採掘の痕跡と考えていましたが、平成13年度に間歩坑口周辺の岩盤の保存工事をおこなった際、表土直下に岩盤があり、加工した壁面や溝、円形の窪みなどの遺構が存在することが明らかになりました。今回の遺構と調査によって確認された遺構とは何らかの関連があると考えられ、今後検討が必要です。

発掘調査に併せて間歩の歴史的背景を検証するため前述した藤田組操業の様子や昭和18年に大きく地形を改変した山陰大水害の様子、「龍源寺間歩」の名称を検討しました。まず、現在の道は銀山川の対岸に位置していますが、昭和18年の水害以前は間歩の坑口と同じ側にあったことが江戸時代の絵図や明治期の地図から明らかになりました。

次に「龍源寺」という間歩名について連想されるのは現在の邑智郡川本町にある龍源寺です。龍源寺は臨済宗東福寺派で応安元年（1368）に小笠原長氏によって創建されたと伝えられています。

また龍源寺間歩近くにある「甘南備」坑という間歩名と、現在桜江町にある甘南備寺（真言宗）が中世小笠原氏の代々の祈願所であったことから、寺が実際に存在して間歩名となったのではなく、小笠原氏と何らかの関わりのある坑道と考えることも出来ます。（遠藤）

▼古写真（藤田組操業時代）



世界遺産登録を目指し シンポジウム「ここまでわかった石見銀山」を開催！

大田市外2町広域行政組合 企画担当 大門 克典

石見銀山遺跡の調査成果をテーマに、シンポジウム「ここまでわかった石見銀山」（主催／大田市外2町広域行政組合）が、2月11日（祝）大田商工会議所において開催されました。

石見銀山遺跡は、発掘、科学、文献、石造物、民俗、街道などの分野で調査が進められており、総合調査の始まった平成8年以来、遺跡の全容解明にむけ成果が上がってきました。今回のシンポジウムは、調査関係者や会場に集まった参加者が総合調査の成果から遺跡の全体像を掴み、世界遺産登録に向け、機運を高めることを目的としました。



▲調査担当者による報告会



▲会場の様子



▲藤岡大拙氏による基調講演

午前の部は、研究者、調査担当者、行政関係者を交え総勢14名による調査報告会を行いました。基調報告は、「発掘調査の成果とねらい」（遠藤浩巳、中田健一氏／大田市教委）、「16世紀末における毛利氏の石見銀山社会と鉱山社会」（松岡美幸さん／文献調査担当）、「石見銀山遺跡総合調査における科学調査について」（鳥越俊行氏／岡山大学）、「民俗調査・街道調査から」（多田房明氏／温泉津小教諭）、「石見銀山遺跡・石造物調査」（鳥谷芳雄氏／県文化財課）といった内容をビデオ映像やスライド等の画像を用いて紹介し、関係者らによって補足が付け加えられました。

午後の部は、調査整備委員会の藤岡大拙委員（島根県立島根女子短期大学学長）に「石見銀山遺跡総合調査に期待すること」と題した基調講演で、石見銀山遺跡の調査の歴史と最近発表された文献3部集（偏年資料綱目、改訂版歴史年表、論文集）についての紹介していただきました。最後に、「世界遺産登録にむけ、これからは住民のパワーが必要。行政も拠点となる施設を作してほしい」とまとめられました。

つづいて、パネリストに田中義昭氏（元島根大学教授）、勝部昭氏（県教育次長）、村上隆氏（奈文研主任研究官）、多田房明氏（温泉津小教諭）、コーディネータに大國晴雄氏（大田市）を向かえパネルディスカッションを開催しました。

パネリストから、「これまでの調査で全体像解明への方法論はつかめた。世界遺産登録に向け、住民パワーと行政の頑張りが必要。（田中義昭氏）」、「調査充実させ、世界遺産登録されているメキシコなどの中南米3大鉱山と連携したシルバースセンターを作り、世界の銀の情報を石見に集め発信する拠点を目指してはどうか。（村上隆氏）」、「調査成果を住民に還元していくことが大事。次の世代に遺跡を継承していく子どもたちのため学校教育との連携と学習機能を持った拠点施設が必要。（多田房明氏）」、「世界遺産登録に向け早期に街道の追加指定が課題。また、鉱山技術解明のため科学分析による踏み込んだ調査が必要。（勝部昭氏）」など、世界遺産登録に向けて貴重な提言をいただきました。



▲パネルディスカッション

「鏝絵の魅力③」

渡部 孝幸

先日、兵庫県は篠山左官技術研究会の一行17名を案内しました。曇り日和でしたが鏝絵ツアーにはほどよい天候でした。朝、「かんぼの宿三瓶」へ迎えに行き驚いたのは、大型の観光バスで来ていたことです。さて、このバスでどこまで回れるかなと思いつきながら、最初の見学地、邑智町粕測へ行くのに、新しく出来た池田トンネルを通過して別府に出てから国道375号線を下りました。



▲山根家

粕測では、平成13年6月、堀尾家の改修に併せ、妻壁にセメントアートの第一人者・品川博さんが作った「龍」と林家の土蔵の蔵飾り「鳳凰」「鐘馗」を見学した後、別府まで引き返し、そこから町道に入り惣森へ向かいました。

今回紹介する山根家へ向かう道中は、バス一台がやっと通るほどの道幅。特に余裕のないカーブが大変で、それでも何とか山根家へ到る谷の入り口まで辿り着きました。これから先は歩かなければなりません。私が鎌を持って先導する姿を見て皆さん驚かれました。

この鏝絵に会うには、私の案内がなくては不可能かもしれません。それこそ何度も来ているわが「まちなみ探偵団」のメンバーですら迷ってしまいます。それにしてもなぜこんな草深い山里に鏝絵があるのと皆さんいわれます。

谷川に沿って、道なき道から転げ落ちないように用心して登ること十分余り。突然視界が開ける場所

に出ると山の中腹に一軒の民家が見えてきます。周囲に目をやると、以前は田畑だったところに草が生い茂り、イノシシがわが物顔で荒らし回っている跡が目につきます。当主の山根千和世（ちとせ）さんが一人暮らしの不便さから山を下り、家を空けて5,6年たつが自然の変貌は実に早いものです。

山根さん方を初めて訪れたのは8年ぐらい前になるでしょうか。電話で地域の公民館に勤めている方からおおよその場所を聞き出し勘を頼りに一人で探し当てることができました。その時は、山根さん夫妻に出迎えてもらいました。

鏝絵は、茅葺き屋根を鉄板で覆った主屋に並んで建つ土蔵風の洒落た離れの2階戸袋にあります。西日のせいか、遠くから輝いて見えました。西向きの正面の戸袋には「竹林に虎」、北向きの戸袋には「鯉の滝登り」。他にも装飾が施され、左官の余技とは思えない出来栄です。

感動と興奮さめやらぬまま「なぜここにこんなすごいのが」と尋ねると、川本町出身の萩原春市が「材料を出してもらえば記念に残しておきます」といって、昭和6年、離れの完成にあわせて製作したといひます。跡取り娘の千和世さんは、「私が若いころは色が鮮やかでそれはもう見事でした」と回想。かつては隣家もあり、道も通っていて、見学者も絶えなかったそうです。



▲竹林に虎

今まで二百人近くの人たちにこの道中の難渋を体験させていますが、気の毒に思ったことは一度もありません。この鑊絵のすばらしさは、そうした、苦しさを心地よい感動に変えてくれる力があると思うからです。

鯉は竜門という黄河上流の急流を登りきると龍になるという中国の故事があります。「登竜門」という言葉のいわれです。

ここに、作家の荒俣宏さんを案内したことがあり、日も落ちて、晩秋の枯れスキの向こうの十三夜の月を眺めながら「鑊絵見て 恋しがるべき 秋はこぬ」と一句をひねられたあと「妖怪巡礼団が、風流を楽しんじゃ、サマにならないね」と笑いながら話されたことが懐かしい。

残念なのは、将来この家屋の崩壊とともに鑊絵の鯉の寿命も尽きてしまうことです。この鑊絵は山根さんたち一家の「元気印」だったのかもしれない。



▲鯉の滝登り

温泉津町からのほっと情報

蹄鉄は馬の蹄を保護するためにつくられた器具で、装蹄の文化が日本に根付いたのは近代に入ってからとされています。この蹄鉄は昭和40年頃、温泉津町西田地区の先見谷川沿いの谷筋で地元の人によって採集されました。

前後8.9cm、左右8.3cm、幅は最大で1.8cm、厚みは5mmほどあります。前方に小さな折り返しがあり、釘穴が左右に5ずつ、計10個あり、うち一つには釘がそのまま残っています。裏面の左右には溝が切っていますが、摩耗してかなり使用されていた形跡がうかがえます。

採集場所は石見銀山街道の一つである、沖泊・温泉津ルート沿いであり、銀山で産出した銀・銅や物資の輸送に利用されていた道筋にあたります。この付近には馬車道とみられる石垣を伴った近代の道路跡が残っています。また、これより銀山側に向かうと、降路坂という険しい坂道がつづき、江戸時代、正保2年(1645)作成の「石見国絵図」には「がうろ坂難所十九町、坂冬ハ牛馬往還難成候」と記されました。

この蹄鉄は小さい方で、大きさからはかなり小型

西田地区採集の蹄鉄

の馬に装着されていたと想像されます。近代、九州や北海道の炭坑では坑内作業に小型の馬が利用されていたと言います。

この蹄鉄は偶然に発見されたものですが、石見銀山とその周辺の歴史のなかで馬がどのような役割を果たしたのかを考える上で興味深い資料といえるでしょう。(鳥谷)



石見銀山遺跡調査活動日誌抄

下半期・平成14年11月～平成15年3月

11/1	熊谷家聞き取り調査(於:大森) (市・文建協ほか)	1/20~21	街道文献調査(絵図調査) (於:津和野町教育委員会)(県)
11/1~2	街道建造物調査(於:仁摩町内) (浅川滋男氏、県ほか)	1/22~24	熊谷家現地指導 (文化庁田中技官)(市)
11/6~7	第1回石見銀山遺跡調査整備委員会 (於:大田市)	1/25	国土交通省視察(市対応)
11/7~8	科学調査部会(於:大森) (高田潤氏・村上隆氏・鳥越俊行氏ほか)	1/26	文化財防火デー(消火訓練ほか)
11/13	於紅ヶ谷49番間歩、鑊跡岩盤保存処理 (科学調査)	1/31	バッファー協議(県・一市二町)
11/14	大田高等学校、地域学習19名(於:大森) (市対応)	2/4~7	文献調査(於:山口県文書館) (県・文献調査団)
11/17	発掘調査現地説明会(於:大森) (市・広域行政組合ほか)	2/7	韓国ウルサン大学教授陣視察 (於:大森)(市対応)
11/18~19	熊谷家保存修理現地指導 (文化庁田中調査官)(市)	2/11	シンポジウム 「ここまでわかった石見銀山」 (広域行政組合主催) (於:大田市商工会議所)
11/18~20	文献調査(於:山口県文書館)(県)	2/17	街道現地踏査(於:仁摩町内) (池橋達雄氏・多田房明氏、県・二町・ 広域職員)
11/29	木次土木建築事務所視察(市対応)	2/19~20	大森町地元説明会 (於:大森町並み交流センター) (市対応)
12/3~4	三次元計測(於:於紅ヶ谷)	2/21	バッファー協議(県・一市二町ほか)
12/4	街道現地踏査(仙ノ山~畑口) (池橋達雄氏、県・市)	2/26	街道文献調査(絵図調査) (於:熊本大学附属図書館)(県)
12/7	街道現地踏査(於:仁摩町内) (池橋達雄氏、多田房明氏、県・町)	3/7	街道調査打合(県・広域)
12/11~12	街道文献調査 (於:温泉津町教育委員会)(県)	3/7~8	伝建現地指導(文化庁梅津技官)(市)
12/13	科学調査分析試料打合 (於:調査事務所) (鳥越俊行氏、県・市)	3/12	文献調査(於:桜江町大貫) (田中圭一氏、原田洋一郎氏ほか)
12/17	文献調査(於:勝源寺)(県・市)	3/13~15	文献調査(熊谷家文書) (於:大田市立図書館) (小林准士氏、鳥根大学生ほか)
12/20~25	文献調査(於:邑智町粕淵 浄土寺) (田中圭一氏、仲野義文氏ほか)	3/16	石見銀山遺跡シンポジウム 「世界遺産を語る」 (県主催)(於:あすてらす、大田市)
12/23	街道現地踏査(於:仁摩町内) (池橋達雄氏、多田房明氏、県・二町、 広域行政組合)	3/17	街道調査打合(於:大田市役所) (県・一市二町・広域)
12/25	バッファーゾーン検討会議 (於:大田市役所)(県・一市二町・広域)	3/17~18	熊谷家家財調査指導(小泉和子氏) (市対応)
1/14	街道文献調査 (於:浜田市立図書館)(県)	3/19	第2回保存管理計画策定委員会 (於:大森町・市主催・市二町)
1/18	街道現地踏査(於:仁摩町内) (池橋達雄・多田房明調査員、県・町・広域職員ほか)		

石見銀山遺跡調査活動日誌抄

下半期・平成14年11月～平成15年3月

3/19～20	街道調査指導(於:温泉津町西田ほか) (文化庁伊藤調査官)	3/26	街道現地踏査(於:温泉津・仁摩町内) (池橋達雄氏、県・広域)
3/21～22	石見銀山探索ツアー(県主催) (於:仙ノ山、大久保間歩ほか)	3/28	街道調査検討会議 (於:島根県立博物館) (調査員、県・一市二町、広域)

シンポジウム「石見銀山の原像を探る－世界遺産登録をめざして－」

主催 島根県、島根県教育委員会

後援 大田市、大田市教育委員会、温泉津町、温泉津町教育委員会、仁摩町、仁摩町教育委員会、
大田市外2町広域行政組合、日本文化財科学会、(報道機関各社) (予定)

開催日時:平成15年5月16日(金) 18:00～19:30

会場:島根県民会館大会議室

一般公開、入場無料

●パネルディスカッション

●コーディネーター

岡部 康幸氏(山陰中央新報社論説委員)

●パネリスト

田中 義昭氏(元島根大学法文学部教授、石見銀山遺跡調査整備委員会委員、考古学)

村上 隆氏(独立行政法人奈良文化財研究所主任研究官、石見銀山遺跡調査整備委員会委員、歴史材料科学)

井澤 英二氏(九州大学名誉教授、資源工学)

遠藤 浩巳氏(大田市総務部石見銀山課石見銀山係長、考古学・文献史学)

勝部 昭氏(島根県文化振興財団事務局長)

●企画の趣旨

日本屈指の鉱山遺跡である石見銀山。島根県教育委員会では平成8年から大田市・温泉津町・仁摩町の各教育委員会と連携しながらこの遺跡の総合調査を進めてきました。今日では世界遺産登録を目指して地元に関心も高まりつつあります。

石見銀山の歴史はこれまで文献史料を中心に語られてきましたが、発掘、石造物、間歩(坑道)、科学などからなる総合調査が明らかにしたものは、いままでとは異なった新たなイメージを提供するものであり、調査の手法や内容が日本における鉱山遺跡などの生産遺跡の調査研究をリードしつつあると言っても過言ではありません。

総合調査がこれまでに何を明らかにし、また、現在何が問題になっているのか、そして、石見銀山における調査研究が日本の鉱山遺跡の中でどのように位置づけられ、これからどのような役割を果たして行こうとするのか。

石見銀山をよく知り、考古学・歴史材料科学・資源工学それぞれの立場で第一線に立って調査研究されている方々を招き、石見銀山遺跡調査の現在と未来について熱く語って頂きます。

●閉会終了 19:30を予定

情報 の 広 場